プリヨンボダー・デェビー

（ジョゲンドラ・ナート・グプタ著）
（『ベンガルの女流詩人』より）

春日井　真　英　訳

プリヨンボダー・デェビー

『レヌ』（花粉）、『ポッロレカ』（手紙）、『オンシュ』（光）などの詩集で、詩人プリヨンボダー・デェビーの名はベンガル文芸界によく知られている。彼女の詩は短いけれども、その一つ一つには読む人の心を打たずにおかないものがある。どの詩をとってみても、彼女の心の奥底に咲く花の露にぬれ、泣いて耐えているかの風情を見ることができるのである。高原の泉の水が、峩々たる山ふところをしずかに歌をうたいながら伝い下りてくるにつれ、その固くとざされていた彼女の胸を詩心がゆっくりとゆり動かしたのである。詩人としての彼女はそれまでの文芸界に新風を吹きこみ独自の地歩を築き上げるのであった。

プリヨンボダー女史は悲しみの詩人である。しかもその悲しみと苦悩は彼女の詩に溢々としている。すべての読書子は Vanitas Vanitatum 虚しい、空しい、という彼女の嘆きに気づかせられる。

すべての春の花の芳香で
私の野辺の送りを見守ってほしい。
花々に季節があるように
人にも華やかな刻がある。
生まれてよりの歩みをごらん
私たちは生まれ、育ち、土に帰る。

＊　＊　＊

甘い息、潔らかな瞳は
芳香のように消えて滅びた。
それはまさに
影が太陽を待つようなもの。
王の野望の虚しさは
戦利品と死者の数

この世の名声をすて
風をとらえようと網を織る。

ここにプリヨンボダーの詩の原点といいうる絶望、心の脆さ、苦悩を見ることができる。詩は彼女の体験に基づくが、その体験こそは彼女の人生における原風景なのである。プリヨンボダー女史の簡単な伝記を以下に記そう。この略伝を読めば、きっと読書子は、彼女の詩が何故このように哀しく切ない調子で充ちているのか理解できよう。

ボノロタ・ロチョイットリー・プロションノモイ・デェビーが彼女の母堂である。父君の名はクリシュナ・クマール・バグチといい、1871年にパブナ郡のブナイガチャという村で、彼女はこの二人の娘として、この世に生をうけたのである。プリヨンボダー・デェビーの学校教育はクリシュナノゴールの女学園で始まるのであったが、それは彼女の母方の祖父ドゥルガ・ダース・チョウドリー氏がこの地の行政官（ウキール）を勤めていたからである。プリヨンボダーが女学園の卒業試験に合格し、奨学金をもらいベトゥン・スクールに入学したのは1882年、彼女が10歳のときであった。そして1890年にはF・A（Fine Arts)、その2年後の92年にはB・A（Bachelor of Arts）の資格をとり、特にサンスクリットでは優秀な成績をおさめて銀メダルを授与されている。この卒業の年に彼女は新しい人生を歩み出したのである。つまり1892年のアシャール（ベンガル暦第3の月。季節として雨期であり7月ごろ）の月にマッドヤプラデーシュ州の有名な法律家であるターラー・ダーシュ・バンドゥパッダヤイ氏と結ばれるのである。彼女の結婚生活は短いものではあったが、それが如何に素晴しい日々であったかは『レヌ』を読まれている人々には明らかであろう。

結婚して、彼女は夫君の住むマッドヤプラデーシュ州のラーイプールに赴くのである。夫君ターラー・ダーシュ氏はその郡における主任弁護士であった。ターラー・ダーシュ氏の寛大で温厚な人柄はその地区の人々の心をとらえたはなさないものがあった。彼はノディア郡の著名な一族の出身であり、学業優秀で大学の奨学金をいつも獲得していた。幼少の頃よりターラー・ダーシュ氏は寛大な人であったことが知られている。彼が大学からもらう奨学金は、ほとんどが友人とのパーティや友人の書籍代に消えていったという。しかも職に就いてからもなおターラー・ダーシュ氏の気前の良さは変わらず、むしろ更に気前がよくなっていくのであった。

1891年、プリヨンボダーは一子ターラー・クマールを出産するが、このときすでに幸運の女神は彼女を見捨てつつあった。翌1895年9月、プリヨンボダーと一人息子を残してターラー・ダーシュ氏はこの世を去る。詩集『レヌ』の詩はこの少し後に書かれたものである。

この詩集には、彼女の体験した悲劇の優しい調子が見出される。

プリヨンボダー女史の人生の最後の希望を打ちこわしていくもう一つの出来事がおこる。そ

れは、未亡人の唯一の心の支えであり、人生の最大のよりどころであった最愛の息子が突然にこの世に別れを告げたことであった。

この後、彼女が様々な福祉事業に専心没頭し、悲しみと苦痛を忘れようと努めるのであった。1915年ブラーフマ女学園の無給講師として教壇に立ち、病魔に冒され、やむなくその職を辞するまでの相当の期間を可愛いい女子学生たちと過ごしたのであった。

健康をとりもどしてからの彼女は、ショロラ・デェビーの創立した「インド主婦大連合」の重責を、クリシュナ・バビニ・ダーシュ女史の死後、自ら担っていく。彼女はショロラ・デェビー女史がパッジャブ州から来られるまでの間その責を十分に果たしたのである。後には「輝ける未亡人のアシュラマ」の責任者となり、その発展のために尽力されたのである。同時に彼女はグレーブス救済ホームの有力な会員でもあった。

以上が彼女の簡単な略伝である。

ある評論家がプリヨンボダー女史を訪れ『レヌ』について論じたとき、「詩集「『レヌ』という作品は一言で追憶といってしまうと過言かもしれません。しかし無心に読むうちに『レヌ』ともう一つの作品（譯者註『タラ』？）との間には共通点が現れるのに気づきます。二つともそのモティーフは同じなのです。悲しみと失意で胸の奥底のビーナー（譯者註 インドの弦楽器の一種）の糸がもう千切れそうになっているのです。でも、この悲しみと苦しみは外側からは全く判らないものです。しかし、『レヌ』の詩はしっかりと内に秘められた悲しみと苦痛とが、あなた（譯者註 プリヨンボダー・デェビー）の心の奥底の扉をひとりでに開いて現れ出たものなのですね。この悲嘆に現実も非現実も混在し、あの世とこの世が接近するのです。『レヌ』に収められている詩は、その深い悲しみをうたっているのです。」

詩集『レヌ』における詩の特徴は、その短さであろう。そして彼女の詩はまるで乙女の頬をぬらす涙のようにやさしく、幼子の微笑みのように甘く、かつ未亡人の眼差しのように冷たいのである。短いけれども彼女の詩はわれわれの心をとらえるのである。暁の未完の夢のような詩片はわれわれの心の中に、数千の蜜蜂の羽音のような単純な旋律の余韻となって残るのである。彼女の詩の詩的生命がどこにあるかを考えてみると、詩の僅かな未完成さ、満足に一寸足りない不満足さ、みのりのない不安にあるということができる。

『レヌ』に集輯された一つ一つの小さな詩片は美しい首飾りのように構成されている。そこでは秘匿されている一つの言葉の意味が様々な旋律の間に見え隠れしながら現れてくるのである。

第一節では、水面に、大地に、空に、蔦葛に、蕾に、花に、新しく芽生えた穂先に、雨で洗われた草原に、いたるところで幾千もの喜びのどよめきが一斉に湧き立っているかのようであり、そして、その喜びは旋律に、香りに、色彩に、光の中に、漣のように様々な調べとなって拡散していく。『レヌ』の短い詩片にはこのような調べが秘匿されている。彼女の詩の巧みさ、

特徴はその一貫した緊張感と、旋律の乱れのなさにある。

彼女の聖人にも似た自制心、そして宗教的な峻厳さはすべて詩の中に偉大な超越的力の存在と、また蜜のような甘美さをもたらしている。しかし、彼女の詩想はだからといって非現実的な世界に遠く遊んでいるわけではない。女史は日常茶飯事のほんの些細な事柄にも素敵な喜びの色彩を与えているので、それらはこの世のものとはまるで違う雰囲気をかもし出している。笑い、涙、困惑、別離の苦痛、恋の切なさといった昔日の思い出を基に、詩人はその胸中にすばらしい寺院を築きあげ、神（デェバ）を祭っているのである。彼女の唱う蜜蜂の甘い羽音にも似た神への讃歌には寺の外の巡礼者たちが心惹かれて耳を澄まし、自分たちも声を合わせて讃えたいと切望させるようなところがある程、読む人の心を惹くのである。ともあれ、『レヌ』はベンガル語による最高級の詩集であると恥じることなく断言することができる。彼女の詩を断片的にではなく、全体を通して読めば読書子は誰でもそこに彼女の詩の原点を発見することができるであろう。

プリヨンボダー・デェビーの詩は主観的、もしくは叙情的なものといえる。詩の大半は彼女の個人的な喜び、悲しみを詩っている。つまり換言すれば、彼女の詩は彼女自身を扱っているに他ならない。

『ウッサルガ』（献身）という詩で

空の彼方に神は居るという
その思いを胸に祭りを捧げよう
ガンジスの上流の聖なる寺の門前で
私は喜びにふるえ頭を下げる。

＊　＊　＊

あなたは今日では遠い彼方に
でも私には心の支え、よりどころ
この愛、喜び、心に思い
この詩をあなたに贈ります。

『レヌ』所収の詩には共通の調べがある。彼女の長い間の苦悩がここで解き放たれているのである。

私の周囲に雲がたちこめ
暗く、涼やかな風は
優しい大地の触れあいで
冷い心にロマンスをよびさまし
誇りを胸に与えます
何回もとどろく雷鳴
揺れる灯は稲妻の伴侶のよう
胸の内の鬱々とした樹々よ
その枝ぶりを高くかかげて
ほほえんでいる花々を誰にみせるのか。
溢れる川は流れて遠く海へ
胸に横切る思いをだいて
なみだ浮べ一人部屋に閉じこもる
思い出すのはあなたの微笑。
もう一度だけ私を
その胸の中でうけとめてください。

最愛の夫君との別離の辛さ、切なさ——その苦悩が様々な形でいろいろな詩に表現されているのである。時には、

この小さな掌いっぱいの
　　私の大事な宝物
あの人が
　　ここでなくしてしまったのです
だから
　　私の人生は、来る日も来る日も
暗い空だけ
　　あなたは遠く
　　別れを告げてもうもどらない。
でも
　　私の心は認めません。
時には笑顔で、時には涙
　　歌をつくり、花飾りをつくり
あなたを待つ私
　　あなたは何を思っているのでしょう。

『オンシュ』所収の詩は短い。しかも、真珠のようにまばゆく美しい。「愛」という詩では

愛よ　かくれているものよ
深い水底の　　どこにいるの
お前は小さな貝に秘む真珠
貧しい者にはすぎたもの。
素晴しい運命の刻に
遠い天国を去り　　太陽の不死の水
たぐい稀な美しいもの
涙の海に落ちておいで。
この世の中に天国を
覚めて祈り、得る人は
無限の水底に溶けていく
そのとき、
あらたな人間の生まれ来る。

だが、果たしていったい幾人の人が彼女のように素晴しい愛を得ることができるであろうか。プリヨンボダー女史の詩は悲しみの言葉で充ちている。彼女はこの世の中のすべてに自分の心の痛みを見出すので、彼女の詩を読む人は誰でも共感を覚えるのである。

私の心の中から矢のように
思いは消えていった。
あなたを捜して
胸のなかの空の矢筒は
もう昔日のように充ちはしない。

悲しみと苦痛を体験して、人間は運命に従順になっていく。つまり、どう考えても、あがいてもいかなる結論にも到れない八方塞りにあるとき、心の奥底で自然にその未知なる力の存在を感じることができるようになる。その力を感じたとき彼女は声をはりあげて、

主よ、あなたの美しさを
　　見ることはできません
この世のなかは眼を惑わすばかり
主よ、あなたが無限であることを
　　私の心は知りました。
あなたの愛の不思議さは
やさしい無私の海となり
私の心が知ったのは
この世の偉大なあなたの姿
貴貧、善悪の区別なく
光と影に喜びをふりわける。
水面、薫風、花、木の実、木蔭、
青い空に限り無い幻(マーヤー)
老いて果てることが永遠の運命
皇帝も乞食もみんな同じ。

この信念が人間に平和の珍味を与え、強調の精神と力強さをもたらしてくれるのである。

以下にプリヨンボダー女史の著書名をあげておこう。

(1)『レヌ』(花粉) 詩集。1900年9月1日　pp. 69
(2)『タラ』(星) 悲詩集。1907年11月18日　pp. 34
(3)『ポッロレカ』(手紙) 詩集。1911年1月10日　pp. 158
(4)『ジレ・ジョンゴレ・シカール』(湖・密林・狩) 翻訳。1924年9月15日　pp. 98
(5)『オンシュ』(光) 詩集。ベンガル暦1334年スラーバンの月 (1927年7～8月)　pp. 125
(6)『チョンパ (花の名) とパロール (木実の名)』詩集。1939年　pp. 38
(7)『オメート』(みなし子)。1935年2月18日
(8)『お話いろいろ』1923年
(9)『バンチュラール』(人名)。1923年

ベンガル暦の1341年 (1934年) ファルグン (ベンガル暦第1の月、2～5月。春) の月にプリヨンボダー女史はこの世を去った。

訳者註・訳者の架蔵するジョゲンドラ・ナート・グプタ氏の編輯になる『ベンガルの女流詩人』は第二版であるが、その第一版はベンガル暦の1337年スラーバンの月 (1930年7～8月にあ

たる）に刊行されたようである。第二版はベンガル暦の1360年ボイシャクの月（1953年4月）に pp. 22＋484 の大冊で刊行された。収録されている女性詩人54名のなかでプリヨンボダー・デェビーは第21番目に出され、pp. 268－276 を占めている。彼女の写真は272ページに載せられてある。ここに出した翻訳はその部分の全部である。